ジェンダー・ギャップ映画祭 | スケジュール

★――上映後トーク

12.4 土	10:15 138分 はちどり	13:15 109分｜サイレント 新女性 活弁・伴奏付き 弁士：山内菜々子さん 三味線：宮澤やすみさん	15:45 71分 浪華悲歌 ★田島良一 元日本大学芸術学部映画学科教授	17:45 135分 ある職場 ★舩橋淳監督 ★平井早紀さん（主演）
5 日	10:30 90分 この星は、私の星じゃない ★田中美津さん 登場人物 鍼灸師	13:30 114分 ハンナ・アーレント ★矢野久美子さん フェリス女学院大学教授	16:30 90分 赤線基地 ★志村三代子 日本大学芸術学部映画学科教授	18:50 90分 5時から7時までのクレオ ★古賀太 日本大学芸術学部映画学科教授
6 月	10:30 98分 RBG 最強の85才	13:30 97分 少女は自転車にのって	16:00 111分 女が階段を上る時	18:50 109分｜サイレント 新女性 活弁・伴奏付き 弁士：山内菜々子さん 三味線：宮澤やすみさん
7 火	10:30 102分 月は上りぬ	13:30 90分 赤線基地	16:00 91分 叫びとささやき	18:30 121分 百万円と苦虫女
8 水	10:30 111分 女が階段を上る時	13:30 90分 この星は、私の星じゃない	16:00 114分 ハンナ・アーレント	19:00 97分 少女は自転車にのって
9 木	10:30 71分 浪華悲歌	12:30 121分 百万円と苦虫女	15:10 102分 月は上りぬ	17:30 168分 この世界の（さらにいくつもの）片隅に ★片渕須直監督
10 金	10:30 90分 5時から7時までのクレオ	13:30 91分 叫びとささやき	16:00 98分 RBG 最強の85才	18:20 138分 はちどり

「自分の目の黒いうちに、区別が差別に昇格した」と名言を残したのは、女性学の大先輩、駒尺喜美さん。映画は社会の状況を反映する。おんなとおとこの「あたりまえ」がどうやって「あたりまえ」になったか、そして「あたりまえ」でなくなっていったかを知るためには映画は最高の歴史資料。ううむ、へええ、まさか、やっぱり、と驚きと感動の連続であることを請け合います！

上野千鶴子
社会学者
認定NPO法人 ウィメンズアクションネットワーク理事長

「ジェンダー・ギャップ」は何も特別な概念ではない。政治家や識者が議論するポリティカル・イシューでも、ジャーナリストが新聞やネットの記事に書くための専門用語でもない。それはわたしたちの足元につねに蹲っていて、この社会を生きる一人一人の暮らしの中に浸み出しているものだ。その影響を受けているのは女性だけではないから、すべての性の人々が考えるべき問題でもある。1本の映画が、自分の生活の中にもあった不可視化された差別や格差について気づくきっかけになることがある。気づいてしまった後に何をするかは、あなた次第だ。

ブレイディみかこ
ライター・コラムニスト

両性のあいだにはどうしても相違があってしまい、それゆえに理解が難しいのであるなら、それを乗り越えさせるものこそ「想像力」ではないか。かつて自作『アリーテ姫』（2000）で語ろうとしたことです。『この世界の（さらにいくつもの）片隅に』（2019）の主人公もアリーテ姫と同じ魔法にかけられてしまい、やはりもともとの名前や、それまで携えてきたアイデンティティを失わされます。そして、そこからの解決がもたらされない、というのは現実の負の面を反映しているから。両映画の間の20年近くの時間はなんだったのでしょう。

片渕須直
アニメーション映画監督

2021 12.4 SAT ― 10 FRI

ユーロスペース
EUROSPACE
03(3461)0211 eurospace.co.jp

東京都渋谷区円山町1-5　KINOHAUS 3F｜渋谷駅下車・Bunkamura交差点左折

前売券｜1回券：¥900（一般・学生ともに）｜3回券：¥2,100
当日券｜1回券：一般¥1,300・学生・会員・シニア¥1,100｜3回券：¥2,850
すべて税込／各回入替制・全席指定席

- ■開場はそれぞれ上映開始10~15分前です
- ■各曜日最初の上映開始30分前より、その日の座席指定券と引き替え/当日券の販売を開始します
- ■劇場窓口では3日前から座席指定券が購入できます
- ■ユーロスペース劇場HPでは3日前～各回開始1時間前まで座席指定券が購入できます（各種クレジットカードのみ。詳しくはユーロスペース劇場HPをご確認ください）
- ■オンライン予約は自動発券機で座席指定券をお受け取りください。上映時間直前は混雑が予想されます。お早めにお引き換えください。
- ■前売券は3日前より劇場窓口にて座席指定券とお引き換えできます。オンラインでのご利用はできません。
- ■やむを得ない事情により作品、上映素材、及び上映時間が変更になる場合がございます
- ■製作から長い月日が経っているため、お見苦しい箇所やお聞き苦しい箇所がございます
- ■トークショーのある上映会は予告編の上映はございません
- ■トークショーは変更・中止となる場合がございます

© 2018 EPIPHANY FILMS. All Rights Reserved.

ジェンダー・ギャップ映画祭

GAP GENDER FILM FESTIVAL

現役日藝生による

© 2012 Heimatfilm GmbH+Co KG, Amour Fou Luxembourg sarl, MACT Productions SA, Metro Communications ltd.
© TOHO CO., LTD.
© Cable News Network. All rights reserved.
© 2008「百万円と苦虫女」制作委員会
© agnès varda et enfants 1954

主催：日本大学芸術学部映画学科映像表現・理論コース3年「映画ビジネスⅣ」ゼミ／ユーロスペース
上映協力：アニモプロデュース／アルバトロス・フィルム／ギャガ／国立映画アーカイブ／ザジフィルムズ
松竹／松竹大谷図書館／セテラ・インターナショナル／タイムフライズ／東京テアトル／東宝／日活
パンドラ／ファインフィルムズ

ユーロスペース EUROSPACE　NFAJ 国立映画アーカイブ

@nua_eigasai2021
www.fb.com/nichigei.eigasai
nichigei-eigasai.com

2021 12.4 SAT ― 10 FRI

性差の問題、これってフィクションですか？

今年で11回目となる日藝生企画・運営の映画祭。テーマは「ジェンダー・ギャップ」だ。昨今、さまざまな性的指向や性自認への理解が広まりつつある。映画界では、#MeToo運動を皮切りに女性監督が活躍するほか、シスターフッド映画、フェミニズム映画が盛り上がりを見せている。それでも日本は、無意識な差別や偏見、特に男女差別が根強く残る国である。これから社会に出る私たち学生は、将来に不安を抱えると共に、既に自分たちもその当事者として理不尽に扱われてきた記憶を持つ。時代と共に見方や評価が変わりゆく芸術、とりわけ時代の価値観が反映されやすい“映画”を学ぶ私たちだからこそ、見過ごされてきたこの問題に改めて向き合いたい。

本映画祭では、主に性差に疑問や悩みを持ち、行動してきた女性を描いた作品を取り上げる。まず中国の蔡楚生監督『新女性』と溝口健二監督『浪華悲歌』は、製作国こそ違えど、どちらの主人公も女性であるが故に苦しい選択を迫られるという同時代性を見せる。女性監督の筆頭であるアニエス・ヴァルダからは『5時から7時までのクレオ』を選出した。家庭や学校での性差に悩む少女の繊細な心情を捉えたキム・ボラ監督の『はちどり』は、スタッフ全員一致で選んだ。日藝映画祭で初選出となるアニメーションは、遊女であるリンの生き方が更に深く描かれた片渕須直監督『この世界の（さらにいくつもの）片隅に』。また、『RBG　最強の85才』や『この星は、私の星じゃない』のように、男女平等の道を切り拓いてきた女性のドキュメンタリー作品にも注目して欲しい。

例年以上に現代の作品を多く選定したのは、今後の自分たちの生き方の鍵が見えやすいからだ。さまざまな理由で上映を断念した作品も多いが、それほどに世界は、今も昔もジェンダー・ギャップに満ちている。本映画祭を通して、変わりゆく男女観に気づき、幅広い層の方々と共に自由に語り合えたら、と考えている。

国立映画アーカイブ所蔵

新女性

蔡楚生｜1935年｜中国｜35㎜→デジタル｜109分
所蔵：国立映画アーカイブ

蔡楚生（ツァイチューション）監督と30年代中国最大の名女優・阮玲玉（ロアン・リンユイ）の代表作。山内菜々子の活弁と宮澤やすみの三味線付き上映。上海で音楽教師の傍ら作家を目指しているウェイミンは、娘とともに自分の力で生きようとする。しかし、ウェイミンは学校の理事長を拒絶したため解雇され、さらに悪徳記者によりデマの記事を売られてしまう。そんな中、娘が病気で倒れる。1930年代の中国で女性が自立して生きるか、男性へ依存して生きるかを問う。映画の展開はその後、阮玲玉に訪れる悲劇を予感させるものとなった。

© 1936松竹 大谷

浪華悲歌

溝口健二｜1936年｜日本｜35mm｜71分
配給：松竹／松竹大谷図書館

溝口健二、トーキー初期の代表作。関東大震災をきっかけに関西へ移り住んだ溝口が、大阪・道頓堀の華やかなネオンの下に生きる女性の悲劇を描く。製薬会社の電話交換嬢である村井アヤ子は、父の借金を返済する為に社長の愛人となる。借金を返済し、好いた男との結婚を考えるアヤ子だが、今度は兄の大学費用を工面することになり、彼女の人生は転落の一途を辿る。本作と同じく、山田五十鈴主演であり京都を舞台とした『祇園の姉妹』と共に、溝口は若い女性が働く現実を冷静に見つめる。

© TOHO CO., LTD.

赤線基地

谷口千吉｜1953年｜日本｜35mm｜90分
配給：東映

当時の米軍基地問題を、商業劇映画として大手映画会社が取り扱った唯一の作品であり、公開直前に反米映画として上映見送りになった異色作。中国から10年ぶりに故郷へと帰還した浩一（三國連太郎）にとって、米軍演習場となった村の変わり様は受け入れ難いものだった。自宅の一室は「パンパン」と呼ばれる米兵相手の売春婦・由岐子（根岸明美）に間貸しされ、それを理由に妹の婚約が破談になってしまう。基地周辺に暮らす女性たちの現実、基地とともに生活する人々のリアルな姿が克明に浮かび上がる。

© 日活

月は上りぬ

田中絹代｜1954年｜日本｜35mm→デジタル｜102分
配給：日活

日本映画の黎明期より女優として活躍した田中絹代による監督第二作。戦争によって妻を亡くした茂吉（笠智衆）と、その3人の娘（千鶴＝山根寿子、綾子＝杉葉子、節子＝北原美枝）は、4人で奈良の地で穏やかに生活していた。ある日、雨宮という男性が家族を訪ねてきたことから波紋が起こる。奈良の美しい風景を舞台に、三姉妹の恋模様から当時の女性を取り巻く社会が見えてくる。脚本は斎藤良輔と小津安二郎。2021年カンヌ国際映画祭クラシック部門に選出。

© 1960 東宝

女が階段を上る時

成瀬巳喜男｜1960年｜日本｜35mm｜111分
配給：東宝

女性映画の名手として知られる成瀬巳喜男が女性の哀愁と力強さを描く秀作。菊島隆三が初のオリジナル・シナリオを手がけ、音楽は黛敏郎、衣装には長年彼の映画に出演し今回も主演の高峰秀子と錚々たる面々を迎え製作。雇われマダムとして働く圭子や同僚たちそれぞれの生き方を、銀座のバー「ライラック」を中心に展開する。男と金に翻弄される当時の女性の生きづらさ、それでもなお己を奮い立たせバーへと続く階段を上る姿が必見。3度のテレビドラマ化を経た、長きに渡り愛される一作。

© agnes varda et enfants 1994

5時から7時までのクレオ

アニエス・ヴァルダ｜1961年｜フランス＝イタリア
35mm→DCP｜90分｜配給：ザジフィルムズ

癌の診断結果が分かる夕方5時から7時までの間、パリの街を彷徨うポップシンガーのクレオ。不安に襲われる彼女の心象が、街の風景とリンクしてリアルタイムで映し出される。友人や見知らぬ人々と出会いながら、女性として、1人の人間としての生き方を探っていく。作曲家でありこの映画の音楽も担当するミシェル・ルグランとクレオを演じるコリーヌ・マルシャンのデュエットシーンがある事や、ジャン＝リュック・ゴダール、アンナ・カリーナがカメオ出演をしている点も本作の見どころだ。

© 1973 AB SVENSK FILMINDUSTRI

叫びとささやき

イングマール・ベルイマン｜1973年｜スウェーデン
35㎜→DCP｜91分｜配給：ザジフィルムズ

スウェーデンの巨匠イングマール・ベルイマンが、4人の女性の渇きと孤独を鮮烈な色彩で描く人間ドラマ。19世紀スウェーデンの上流貴族の次女・アングネス（ハリエット・アンデション）は、病に苦しめられていた。彼女を看病する姉妹と召使の自分本位な愛の欲望が、死にゆくアングネスと共に浮き彫りになっていく。『野いちご』のイングリッド・チューリン、『鏡の中にある如く』のハリエット・アンデション、『仮面｜ペルソナ』のリヴ・ウルマンのベルイマン組が三姉妹を演じた。第46回アカデミー賞撮影賞受賞。

© 2008「百万円と苦虫女」製作委員会

百万円と苦虫女

タナダユキ｜ 2008年｜日本｜35mm｜121分
配給：日活

ひょんなことから前科持ちになってしまい、実家を離れて百万円を貯めるごとに各地を転々としながら、様々な経験を通し成長する姿を描いた主演・蒼井優の青春ロードムービー。町の人々に巻き込まれながらも、自分が関われる範囲で自らの思いに背くことなく、いろいろな町に住んでゆく。出会いと別れを繰り返し、人生や将来など深く考えずに一つ一つの瞬間を大切にしながら自分だけの生き方を探す主人公の姿が印象に残る。この作品で監督は日本映画監督協会新人賞、蒼井優は芸術選奨映画部門新人賞を受賞。

© 2012 Heimatfilm GmbH+Co KG, Amour Fou Luxembourg sarl,MACT Productions SA ,Metro Communications ltd.

ハンナ・アーレント

マルガレーテ・フォン・トロッタ｜2012年｜ドイツ＝ルクセンブルク＝フランス｜DCP｜114分｜配給：セテラ・インターナショナル

1963年発表当時、大きな批判を浴びた裁判記録『エルサレムのアイヒマン』。その著者である哲学者ハンナ・アーレントの苦悩と力強い意思を描く、実話に基づいた伝記ドラマ。アイヒマンは、果たして本当に凶悪な虐殺者だったのか。「悪の凡庸さ」を提唱したアーレントのその背景とは。1人のユダヤ人として、女性として、世間や友人の批判を受けながらも持論を伝える彼女の姿から“自分の選択”を貫く力を女性監督が映し出す。2013年ドイツ映画賞作品賞銀賞・主演女優賞、2013年バイエルン映画祭主演女優賞を受賞。

© 2012, Razor Film Produktion GmbH, High Look Group, Rotana Studios All Rights Reserved.

少女は自転車にのって

ハイファ・アル＝マンスール｜2013年｜サウジアラビア
DCP｜97分｜配給：アルバトロス・フィルム

サウジアラビア初の女性監督・ハイファ・アル＝マンスール監督が自国に広がる女性差別を描いた映画。少女が自転車に乗ることさえよく思われない国の中で、なんとか自力で自転車を手に入れようとコーランの暗唱大会に出てしまう主人公の少女・ワジダの奮闘を描く。女性監督の視点で描かれるこの作品は、後半に優しい母の存在も加わって、将来に小さな希望を抱かせてくれる。2012年ヴェネチア国際映画祭で国際アートシアター連盟賞を受賞。

© Cable News Network. All rights reserved.

RBG 最強の85才

ジュリー・コーエン、ベッツィ・ウエスト｜2018年｜アメリカ
DCP｜98分｜配給：ファインフィルムズ

米国歴代2人目の女性最高裁判事、ルース・ベイダー・ギンズバーグを追ったドキュメンタリー。彼女の名前の頭文字をとった「RBG」として知られ、数多くの裁判を通して女性やマイノリティの権利獲得に貢献した。自由の国アメリカに根強く残る性差別と闘い続けたRBGと、彼女を支え続けた夫との愛溢れるエピソードも描かれている。
第91回アカデミー賞長編ドキュメンタリー賞、歌曲賞の2部門にノミネート。エンドロールでジェニファー・ハドソンが歌う「I'll Fight」も必聴。

© 2018 EPIPHANY FILMS. All Rights Reserved.

はちどり

キム・ボラ｜2018年｜韓国＝アメリカ｜DCP｜138分
配給：アニモプロデュース｜配給協力：ギャガ

韓国の14歳の少女が直面した世界を描いた、女性監督キム・ボラの長編デビュー作。1994年、まだ中学生のウニが受け入れるにはあまりにも多くのことが起こった世の中で、彼女はなんとか現実を受け入れようと努力する。少女期ならではの日常の中の神秘的な瞬間が、普遍性を持って描かれる。ウニの不満に無関心な家族や、当時の女性に強いられた我慢を、彼女の目を通して生々しく映し出す。ベルリン国際映画祭など国内外の映画祭で50を超える賞を受賞。『キネマ旬報』ベストテン外国映画2位。

© 2019こうの史代・双葉社／「この世界の片隅に」製作委員会

この世界の（さらにいくつもの）片隅に

片渕須直｜2019年｜日本｜DCP｜168分
配給：東京テアトル

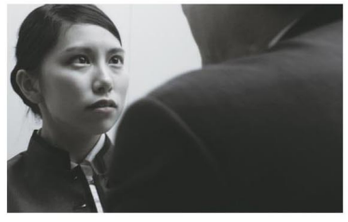
こうの史代の漫画『この世界の片隅に』をアニメーション映画化。ロングランヒットを記録した同名映画にリンの世界を中心に250カットを超える新エピソードを追加し、これまで目にしていたシーンや人物像がまったく異なる印象で息づく新作。日本が戦争の真っ只中にあった昭和19年、広島・呉に嫁いできたすずは迷い込んだ遊郭で同世代の女性リンと出会う。いつしか互いに心通わせていく2人だが、すずが夫・周作とリンの過去に触れてしまう。登場人物のさらにいくつもの物語が、私たちを新たな世界へといざなう。

© 2019 バンドラ＋BEARSVILLE

この星は、私の星じゃない

吉峯美和｜2019年｜日本｜DCP｜90分
配給：バンドラ

1970年の日本のウーマンリブ運動をカリスマ的に牽引した田中美津さんを4年間に渡り追ったドキュメンタリー。鍼灸師として女性の心身に向き合う傍ら、執筆や講演を通して女性解放、そして一人の人間としての「私の解放」を訴えかける。また、沖縄・辺野古に足繁く通い、現在も幅広く活動を続ける。監督はNHKなどのドキュメンタリー番組で演出経験豊富な吉峯美和。「この星は、私の星じゃない」と呟きつつ、全身全霊でこの星に立ち続ける田中美津の、人々の心に響く活動の記録。



ある職場

舩橋淳｜2022年公開｜日本｜DCP｜135分
配給：株式会社タイムフライズ

ホテルの女性スタッフが上司からセクハラを受けたという実際の事件をもとに、その後日談をフィクションとして映画化。セクハラに留まらず、SNSでの個人情報流出にも悩まされ、傷心した彼女を励ますべく同僚たちが会社の保養所に集まる。しかし、SNSの犯人がスタッフの中にいるという疑惑が芽生え、人間関係に亀裂が生じる。被害者である女性の絶望、事件を隠蔽しようと企む上層部や、互いを疑う同僚たちの闇をモノクロで映し出す。2020年東京国際映画祭コンペティション出品作品で、本映画祭にてプレミア上映。